

『千載佳句』と唐代の文学

劉, 潔

<https://doi.org/10.15017/1560372>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名	劉 潔			
論 文 名	『千載佳句』と唐代の文学			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	静永 健
	副 査	九州大学	教授	川本 芳昭
	副 査	九州大学	教授	辛島 正雄
	副 査	九州大学	准教授	南澤 良彦

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、我が国において十世紀に編集された唐詩の名句選集である『千載佳句』を中心に、そこに収録された唐詩人の作品群が、同時代の中国において実際にどのような評価を得ていたのかを考察し、また昨今の中国において次々と出土している唐代の碑文資料（墓誌銘など）との照合を通じて、さらにその詩人たちの事績等について新たな解明と検証を試みたものである。

『千載佳句』は、平安時代の日本で編集された書籍であるが、そこに収録された詩句の本文は、唐代そのままの原文（オリジナルに限りなく近い本文）を多く保存する点で、まことに貴重である。これまで江戸化政期の市河寛齋が本書をもとに『全唐詩逸』を出版して清朝の文人たちを驚かせて以来、1940年代には金子彦二郎、また90年代には中国の陳尚君等によって基礎的な研究が展開された。しかし、これら先行研究およびそれに連なる昨今の研究動向では、『千載佳句』の本文のみに注目が集まり、個々の作品の全体的な解読や作者についての十分な考察が及んでいなかった。本論文の提出者は、この従来の研究の盲点を突き、『千載佳句』に収められる唐詩句およびその作者たちについて、生涯の経歴や当時の中国唐朝における評価、またそれらの作品群が一体どのような詩集として編集され海外にもたらされたのかを、残存する資料をもとに能う限りの考証を重ね、その結果を示した。それらの結論の中には、残存資料の限界から、いまだ推測の域を出ぬ部分もあるが、いずれも唐代三百年間の文学史研究に新たな視点を提供する有意義な成果であると言える。

例えば、盛唐の著名な詩人王維の詩歌は、安史の乱（755～763）によってその大部分が散逸し、兵乱終結後に実弟王縉によって急遽かき集められたものが今日の中国に伝わる詩集であるが、我が国遣唐使とも交流がある王維は、その詩歌を生前みずから編集し、異邦の友人にも贈っていた可能性があること、そしてその自編詩集からの抄録こそが今日の『千載佳句』所収の王維詩句であることは、本論文が初めて立証した結果である。また玄宗の弟である岐王李範の詩集がその没後にその諡号を冠して『惠文太子集』として編集され、この唐皇帝遺愛の詩句が、現在『千載佳句』にのみ残る貴重な逸文であるという事実も、本論文によって初めて明らかになったところである。他にも中唐の詩人楊巨源の詩については、『千載佳句』に収められる十五聯のうち九聯もの詩句が後世の中国には残存しないものだが、彼の詩集は、その生前に渤海国の使者が書き写して持ち帰ったという同時代人による証言があり、『千載佳句』所収の唐詩句には、このような周縁の第三国を介して伝えられたものもあることは、本論文によって初めて提出された意見である。このことは、『千載佳句』

中に新羅の文人崔致遠らの詩句が収録されている事実や、高麗朝初期に編集された『夾注名賢十抄詩』との類似からも、十分に首肯し得る考察結果である。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認める。